

◎注意事項をよくお読み下さい



りそな 経済フラッシュ

(ECB <欧州中央銀行> 理事会)

2022/10/28

りそなホールディングス 市場企画部

〇 概況

- ◆ ECB理事会では2会合連続となる0.75%の大幅利上げを決定した
- ◆ 保有資産の削減については今回は議論していないが、次回12月理事会にて削減方針の原則を決定するとした
- ◆ 全体的に想定内の内容であり、発表後に欧州金利は低下

✓ 10月27日に開催されたECB（欧州中央銀行）理事会では3会合連続での利上げを決定し、預金ファシリティ金利を1.50%、主要政策金利を2.00%、中銀貸出金利を2.25%へそれぞれ引き上げた。0.75%の利上げは2会合連続。金融緩和的環境の終了に大きく前進したとした一方、インフレ率を2%に戻すため、今後の会合で更なる利上げを想定するとした。

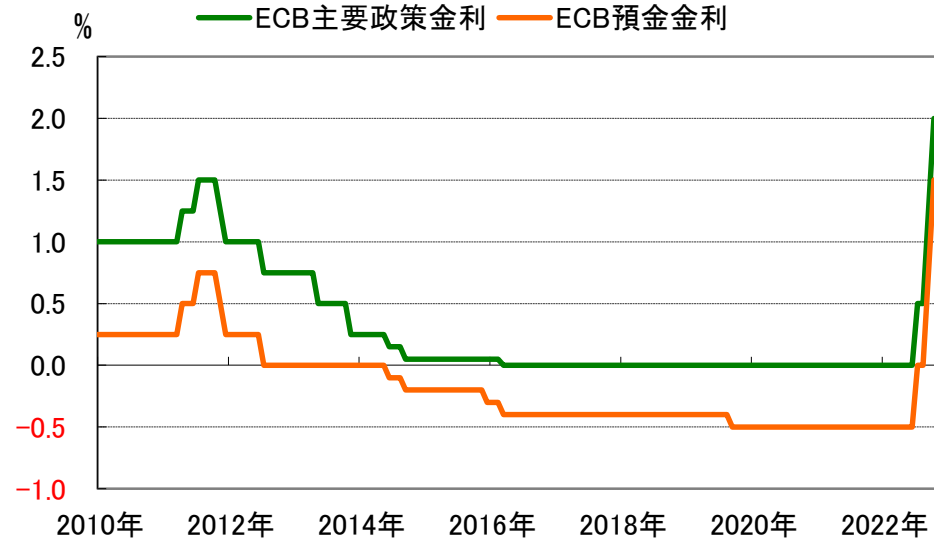
✓ 金融機関の緊急的な資金調達手段であるTLTROⅢの貸し出し条件や所要準備に対する付利金利等の技術的調整を行ったほか、パンデミック緊急買入プログラム（PEPP）で購入した債券の再投資を、少なくとも2024年末までは継続するとした。通常の買入プログラムであるAPPの資産縮小について、ラガルド総裁は12月の理事会で削減方針の原則を決定するとした。

✓ ラガルド総裁の記者会見では、経済には下振れリスクが、インフレには上振れリスクがあると認め、今後数回の会合で利上げを継続するとした。ターミナル金利（利上げの到達点）は中立金利を上回る可能性があるとしたが、それぞれの明確な水準については今回も回答を避けた。引き続き、「データ次第」「会合毎に検討」という点を強調した会見であった。

✓ 全体的に想定内の内容であり、ラガルド総裁が経済の減速について言及したこと等から、少なくともECB内でタカ派姿勢が強まっているとの印象は受けなかった。会見中には欧州金利が低下しEURが軟調となる場面があった。

✓ 市場では世界的に利上げ幅の縮小が意識されはじめているなか、今回のECBはTLTROⅢや所要準備への付利金利等の技術的な調整にリソースが割かれ、新たな論点は乏しかった。英国の財政問題や欧州経済の懸案事項であるエネルギー問題がやや沈静化し、EUR相場は一時パリティを回復する等、安定を取り戻しつつある。一方、ユーロ圏の物価上昇率は依然としてピークアウトの兆しが見えておらず、引き続きECBの舵取りには注目が必要だろう。

【ECB政策金利と預金金利】



【ECBスタッフ見通し（9月時点）】

	2022年	2023年	2024年
実質GDP成長率	+3.1	+0.9	+1.9
6月時点の見通し	+2.8	+2.1	+2.1
HICP(消費者物価)	+8.1	+5.5	+2.3
6月時点の見通し	+6.8	+3.5	+2.1

前年比、%

【出所】ECB、Bloomberg

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。